日本史俗川柳狂句

二

岡田三面子編著
中西賢治校訂

古典文庫

岡田三面子編著
中西賢治校訂

日本史侍川柳狂句

二

古典文庫

古典文庫第三一二冊

昭和四十八年五月二十日印刷発行

非売品

日本史伝川柳狂句

第二冊

校訂者　中西賢治

発行者　吉田幸一

印刷者　帝都印刷製本株式会社

発行所　114 東京都北区西ケ原三ノ三四ノ一二

古典文庫

電話（九一〇）二七一七

振替口座東京一五五九七番

凡　例

一、第二冊として、三面子原文の第二冊「博物志」（九七頁）から「新嘗祭」（一七一頁）まで（以上で「上古之巻」を終り）と、中古之巻に入り、三面子原文第三冊の「駒引銭」（二〇五頁）までを収めた。

一、校訂に際しては、三面子文をできる限り原本によって照合して、欠字（伏字）を充塡し、誤りを補訂した。

一、巻末の「略号覚書」は、新たに原典の判明したもので、第一冊にも掲げたが、その後さらに判明したものを補訂して、再度掲げた。第二冊目次は新たに作成して加えた。

一、終りに、翻刻にあたり、三面原文の欠字充塡その他について貴重な資料を御貸与下された千葉治（岡田甫）氏、また句の出典については、浜田義一郎氏な

らびに日本大辞典刑行会の芳賀定・倉島長生・鈴木一の三氏の皆様に今回も一方ならぬ御世話に相成った。ここに記して厚く御礼申上げる次第である。

昭和四十八年五月六日

中西賢治

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

岡田三面子先生遺稿

日本史伝川柳狂句　第二冊

（上古之巻　二、人皇初期時代つづき）

○博物志（↑二八九）

○旧本は晋の武帝の世、張華撰。
博物志にも在りさうな持参金　　筥初・一〇ウ

――無類の醜婦

○海士（あま）の焚残（たきさし）（三〇〇）

○日本紀に云ふ。応神天皇五年、伊豆に於て早船を造らしめ軽野（からぬ）と名付

く、同三一（三〇〇）年其朽木を薪とし塩を焼く、中に燃えざる木あり之を帝に献ず、帝新羅より来れる異匠に命し琴を造らしむ、其音美妙、名付けて天の焚（たき）さしという（斉諧俗談巻之三）○（拾芥抄には笛にも此名あり　謡曲敦盛に引用せらる）

豆腐屋と海士の焚さし世にかをり　一五一・二五オ

——仙台公に伽羅の下駄を貰ひし

心浮く琴も枯野の船の板　新三二・ガク六ウ

聖作にあらぬ楽器が妾は得手　四七・一八オ

——琴より三味線

是も又枯野の琴よ冬の松　慶二・田二三ウ

——古事記には仁徳の代枯野とあり

海士の捨舟と勅には乗らず詠　嘉七・入二オ

——枯野を琴に造り搔弾くや——古事記

枯野の舟の琴の音も波返し　野一八・

枯野の舟の琴の音も浮き沈ミ　嘉四・サクラ二オ

枯野の琴に緑もひ波かへし　嘉四・サクラ一ウ

何ゆへ枯野と調べてる琴の説　嘉六・佃五三ウ

○呉織綾織（三〇六）

○応神帝二七年二月、阿知使主父子を呉（浙江）に遣はし織女を求む、呉、漢の工女呉織綾織を奉れり（倭年代記○看秦酒公）

応神の時に二つの羽が渡り　天四辰・智二オ

——鳥に想到

二女連れた船に帆綱も綾を取り　新新六・小一三オ

二女連れた帰朝よそ目に知れぬ綾　新二〇・ヤ八ウ

呉国からトリ二つ来て織はじめ　三八・二オ

——織（はとり）、服部（はとり）と鳥

和に染るまで二女解けぬ物の綾　安政元・リ三オ

機伝授言葉の綾に二女困り　新新六・小六の二六ウ

——言語不通

呉羽織る千筋工女の胸の綾　嘉七・入四オ

何の木かしれぬハ二女の機道具　新新初・小六の二八ウ

——外国産

生茂り彼所（おひ　そこ）も綾なす二女かまへ　新新初・小六の二九ウ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

織姫や蚕扶桑へいゝ貢キ　九一・二オ

――縁語

野も山も錦呉羽の祭りころ　嘉六・佃一一ウ

呉羽鳥錦する木を塒にし　嘉？桜一〇ウ

○黒日売（三一三↓）

○仁徳帝に仕へ、大后の嫉ミを恐れ、吉備の国に逃れ帰る。

黒姫も化粧の目立つ今朝の雪　嘉六・カメ三九ウ

○仁徳天皇（三一六）

○（看王仁二、）応神天皇の第四子大鷦鷯の尊即位仁徳天皇と称す。四

年、高き家に登り、民の炊烟を望み、其貧苦を察して課役を免ずること三年、再びこれに登りて見給ふに、炊烟雲の如し、帝悦び『高き家に登りて見れば烟立つ民の竈は賑ひにけり』新古今集巻七・賀と詠じ給ふ

（有異説）徒然草第七段一

雨漏る宮殿民の咽干さぬ為　安政三・海一三オ

低きへ恵ミ高楼で御遠見　安政元・入杉一オ

民草の烟を笏で数へられ

ありかたい御代は竈に立つ煙　二八・一六オ

賤が家も御製に高き竈山　一〇八・三三オ

低き家の煙りは高き御製なり　四三・六ウ

ひくき民高き御製の筆に乗り　一一九・三三オ

高き家は低を恵む御製也　保一〇・いと一一〇ウ

高き家の詠御（マヽ）は民の御哀憐　一四九・一四ウ

高き家の御製は低き鍋の尻　嘉六・佃三九オ

立消えのせぬは御製の朝煙り　一六三・一〇ウ

飯釜の烟（けむ）も一度は用に立ち　天四辰・松二オ

三度つゝ御製に叶ふありかたさ　三三・三五ウ

世にきえぬ御製の煙り日に三度　一二四別・一八オ

賑はしき煙はアツき御仁徳　梅柳一九・四〇ウ

天皇の御製に民の鍋覗き　宝七丑・一〇・二五日オ

生薪の煙（けむ）も御製の内に入り　四八・二八オ

君見ずや民のかまどは煤だらけ　一二一乙・四七オ

御仁徳塩焼く賤が煙まで　九四・一オ

高き家の御製返歌に田植唄　嘉二・青八ウ

目をこする民無し煙を御叡覧　嘉五・入一三オ

冥加なき泪竈に煙る仁　当新二・琴六ウ

煙りの御製感涙に民ハむせ　嘉四・差五ウ

万民もむせる煙の御神詠　梅柳一四・一二ウ

御製の煙の跡を引く庭竈　嘉六・サイ七オ

竈の御製御在位もやかす米　安政三・海六ウ

高台(たかきや)の御製万歳万々歳　梅柳一二・一オ

鳳凰ハ御製の煙の上で舞ひ　久二・高一六ウ

民の煙に高台(たかきや)の月曇り　梅柳九・一五ウ

高き家の月は烟の雲隠れ　梅柳一二・三一ウ

御製の煙り薄く立つ朝寐坊　一一二・三一オ

引摺の煙御製の外に立　九〇・二三ウ

竈の御製佞臣は煙つたし　久二・高一八オ

御仁徳字に叶ふ御製なり　八五・三〇ウ

民の父母仁は自然の御諱　一三七・三オ

高き家で煙り太平御覧なり　一一一・三九オ

——書名

高き家は御製鳥部野辞世なり　八五・二六ウ

——京の火葬場

鳥辺野は御製の外の夕煙　保八・七一ウ

高き家の御製に漏れし一人者
御製にも漏れしかまとの一人者　拾初・二二オ

高き家を建てる竈の賑かさ？
高き家に登りて大工餅を投　二七・三二ウ

賑ふ御製平土間で吸ふ煙草
飢えぬ代の銭座御製に増す煙り　久三・御二六ウ

御仁徳梅。の御製の香も高し
——難波の梅ならば御製でなし　慶元・サイ一三ウ

叡慮も琴。の緒仁徳の捻(より)をかけ
——海士の焚残を仁徳の御代としたる意か？　梅柳六・一四ウ

嘉六・カメ一ウ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb